

ESDの推進について

気仙沼市立面瀬小学校

1 ESD（持続可能な開発のための教育）について

現在、世界には、環境、貧困、人権、平和、開発といった様々な問題がある。グローバル化や地球温暖化が進む中、私たちの身近な暮らしの中にも地球的規模の課題と出会う機会が増えてきている。未来を生きる子供たちには、先行き不透明で変化の激しい世の中を生き抜くための力を身につけさせる必要がある。

ESDはEducation for Sustainable Developmentの略で「持続可能な開発のための教育」と訳されている。ESDは、たとえ解決が容易でない地球規模の問題であっても、自らの問題として捉え、身近なところから取り組む（think globally, act locally）ことにより、それらの課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すこと、そしてそれによって持続可能な社会を創造していくことを目指す教育理念である。持続可能な社会づくりの担い手を育む教育とすることができる。

ESDは、2015年に国連が提唱したSDGsを追い風にその重要性がやっと認知されるようになった。今後ますます浸透していくはずであるが、それは取りも直さず「地球の危機」が間近に迫っていることを意味する。「宇宙船地球号の乗組員として身につけなければならない資質・能力や態度」の必要性が今後急速に理解されることになると思うが、この資質・能力や態度は、知識の習得だけで簡単に育つものではない。感じ取ったことを言語化して表現し、他者や地域社会に働きかけるなど、具体的な実践を通じたアウトプットの経験を必要とする力であり、様々な経験や体験を重ね、時間をかけて育成していくものである。総合的な学習の時間などの一部の教育活動だけで進めるのではなく、学校教育全体で取り組み、底辺を広げた厚みのある教育活動によって支えられていくものである。

2 ESDスタート校としてのあゆみ

気仙沼市は海の恵みに支えられてきたまちであるが、昭和40～50年代には湾内の環境悪化による赤潮の発生に悩まされ、平成元年に「森は海の恋人」運動の植林が始まるなど、環境意識を高めていく必要があった地域でもある。そのような中、段階的に導入された総合的な学習の時間が平成14年度（2002）から全面実施となった。英語の研究開発校の経験を活かした面瀬小学校は、同年から国際環境教育に取り組んだ。アメリカ等の海外の教育実践に学び、交流して進めた環境教育は、やがて、ESDの理念に沿った実践として多方面で取り上げられるようになった。

気仙沼市教育委員会は、平成16年度（2004）頃に理論導入したESDの視点に基づいて総合的な学習の時間のカリキュラムを見直しながら、各校の特色ある学習活動の創造を進めた。環境教育のほかに、スローフードの運動を背景にした食育、伝統芸能や文化をテーマにした学習、防災学習などがあり、現在につながっている。学校と地域、研究機関、行政などが連携して取り組む推進体制が国内外から広く認められ、平成17年度（2005）にはESDを推進する国際拠点として気仙沼を含む「仙台広域圏RCE」が世界最初の7地域の一つに認定された。ESDを推進する地域拠点として、多様なステークホルダーが一堂に会する円卓会議が面瀬小学校を会場に毎年開催された。その後、平成20年度（2008）には、面瀬小学校がESDを推進するユネスコスクールに加盟し、ユネスコスクール間の交流を活かしながら実践を重ねている。

平成23年度（2011）の震災後には、復興を目指し「海と生きる」気仙沼を支える重要なコンテンツとして海洋教育が導入され、面瀬小学校は平成28年度（2016）に市の海洋教育推進事業実践校の指定を受けた。現在、環境教育と海洋教育を二つの柱にして研究に取り組んでいる。

平成28年度（2016）には、ACCU（ユネスコ・アジア文化センター）から全国24校のサステイナブル・スクールに認定された。ホールスクールアプローチの手法を取り入れながら、教育活動の見直しを図っている。継続的な研究に取り組み、ESDの推進リーダー校としての実践を重ねている。



3 面瀬小学校におけるESDの実践課題について

ESDのスタート校としての実践を重ね、サステナブルスクールに認定された面瀬小学校は、ESDの推進リーダーという使命を背負っている学校である。新学習指導要領の基盤となる理念にESDが取り入れられたことや、地球環境の危機的状況が進み全世界で取り組んでいるSDGsに込められている必要もあり、ESDを校内研究に位置付け継続的に研究して取り組んでいる。しかし、ESDやSDGsそのものを研究主題の前面に出してしまうことで、指導法の工夫改善を進める授業研究との距離が開き過ぎてしまうことが懸念されていた。そこで、身に付けさせたい力や目指す児童像を焦点化し、ESDの実践経験が少ない指導者にもイメージできるシンプルな研究主題「自分の考えをもち、行動する子供の育成」を設定することにした。これによって、学校教育目標と一貫性のあるものになり、どこに力点を置いて研究や指導をすればよいか明確になった。ESDの推進は、「新たな教育を別に行う」ことではない。「教育の目的を示す理念」として、これまで行ってきた実践研究と整合性、親和性のあるものとしてとらえることができた。

また、ESDの理念を具現化するコンテンツは非常に重要であるが、「〇〇という教育活動を行っている」ことに終始してしまいがちである。そのコンテンツを通してどのような力を身につかせようとしているのか、どのような力が身についたのかという視点を外してはならない。本校の研究では、子供たちの変容が見えやすい教科・領域に、ある程度絞って取り組むことにしている。総合的な学習、生活科、理科、社会科、特別活動の中から、各学年部が重点化を図って進めてきた。一つの教科・領域に絞って校内研究を進めてきた経験しかない教師にとっては、的が絞りきれず不安だったかもしれない。しかし、「自分の考えをもち、行動する子供」を学校全体で育てていくのだという明確なメッセージによって、様々な教育活動を見直し、共通の意識をもって取り組んでいくことができた。

さらに、総合的な学習が創設された時に示された「教科・領域の学習が相互に影響しあい、関連づけられていく」という学びの特徴を、教師自身が感じ取ることもできたのである。これらの成果は、子供たちの資質・能力や態度の向上を目指した指導法の工夫改善を進めていく上で、重要な示唆を与えるものになっている。



4 本校のESDの実際

(1) ESDの進め方

「宇宙船地球号の乗組員として必要な資質能力、態度の基礎を身につけさせる」ための教育ととらえ、環境教育と海洋教育を中心に据え、学校教育目標の下、全ての児童に対して教育活動全体で推進する。

(2) 指導の重点

指導の重点 「自分の考えをもち、行動する子供の育成」

- ① 授業研究を基盤とした校内研究としてESDの推進を一元化する。
- ② 面瀬川を起点とした学習を海や面瀬地区のまちづくりへと発展させ、探究的に進める。
- ③ 地域や専門機関との連携をさらに深め、学習の充実を図り、学びの質を高める。
- ④ 児童による自治的活動や主体性育成の場を重視して進める。
- ⑤ 実践の積み重ねによる成果をデジタル資料室やファイル、研究紀要にまとめ整理する。
- ⑥ ホールスクールアプローチの手法により、教育活動全体を仕立て直す。

(3) 本校のESDで育てたい資質・能力

ESDで育てたい資質・能力	※学年で重点的に育てたい力◎ 育てたい力○	学年部		
		低	中	高
① 人とかかわる力 協力して実践する力	課題解決のために交流したり、話し合ったりする力 多様な価値を認め、相手の立場に立って考え、協力して行動しようとする態度	◎	○	○
② 自分事としてとらえる力 自分の考えをもつ力	他者の意見や情報を基に、自分なりの考えをもち、よりよい解決策を見出す力	○	◎	○
③ 思いや考えを表現する力	収集した情報や調べた結果を関連付けて整理・分析し、自分の思いや考えを伝える力	○	○	◎
④ 挑戦する力	自分たちの生活や暮らしの在り方を見直し、行動する態度/失敗しても粘り強く取り組む力	○	○	◎

(4) 本年度改善を図ろうとしている点について

- ① 昨年度までに、地域に根差した体験的・探究的な学習活動を継承しながら、児童や地域の実態に合わせて、単元開発をしてカリキュラムを見直してきた。今年度は、学習の流れや指導内容について微調整しながら、学習-調査-体験-考察-発表などの個々の学習活動の指導について充実を図っていく。
- ② ESD推進の中核となる生活科や総合的な学習については、昨年度末に研修会を開催して「そもそもどのような学習として進めていかなければならないのか」という基本、根本に立ち返って学んできた。今年度は、生活科と総合に研究教科領域を絞って取り組み、授業を通してさらに深めていく。
- ③ 本校はこれまで、教育活動の助成申請を行い、SDGs アシストプロジェクト実践校、海洋教育パイオニアスクール実践校、河川基金実践助成校、パナソニック教育助成研究実践校、中谷医工計測技術振興財団科学振興助成校などの指定を受けて活動し、学習成果を広く発信する機会を得てきた。今後も、助成金の活用による学習活動の充実とともに、児童や教師の成果発表の機会を積極的に活かしていくこととする。



(5) ホールスクールアプローチについて

ホールスクールアプローチは、教育内容やカリキュラムの方向付けだけでなく、コミュニティ内の連携先団体や地域の人材からの協力を得ながら、持続可能な学校運営を行っていくための考え方、手法である。持続可能性を求めて学校を変革し続けていくことが重要となる。

ホールスクールアプローチを進めるに当たって、学校教育を次の四つの側面から見つめ直し、中心にくる「ビジョン」に向けて一体的に進めていくことが大切である。

- ①「学校の運営」
②「教室内外の学び」
③「設備と環境」
④「地域との連携」

ホールスクールアプローチ・デザインシート (例) (参考 サステナブルスクール vol.2-ACCU)

<p>学校の運営</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 授業研究を基盤とした学校経営 ● 校内研究4~3月、公開研究会11月ほか (研究体制の確立) ● 震災後の心のケア支援体制 ● 探究活動支援体制 (新規: サポートチーム) ● 学校視察受け入れ (ESD 被災地教育) ● 海外との交流学習促進 (Exchange) ● 協働体制の確立 (おたがいさま、のりしろ) ● 学習環境の整備 (図書室充実, Englishroom) ● 運動場、遊具の充実 ● ピオトープの整備 (オモトープ: 観察池, ワイヤレス温度計, 測定記録) ● 学校農園の充実 (新規拡張, 刈草堆肥の利用…循環) ● 樹木の管理と植樹 (みどりの少年団) 	<p style="text-align: center;">宇宙船地球号 自分の考えをもち行動する子供の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 聴き合う: 相手の考えや違いを受けとめ、自分の思いや気づきを伝える子供 ② 支え合う: 願いや思いをもって行動し、協力し助け合う子供 ③ 学び合う: 学習課題を自分事としてとらえ、粘り強く最後まで取り組む子供 	<p>教室内外の学び</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 学習規律の確立 ● 総合や生活科, 理科, 社会科を重点に児童の変容を研究 (変容の見取り) ● 1, 2年生の「まちたんけん」(発見学習) ● 3, 4年の面瀬川をフィールドにした学習 (生き物調査, 流域比較, 森里川海) ● 5, 6年の海を知り守っていく学習、面瀬地区のまちづくり学習 (探究的な学び) ● 大学研究者や専門機関との授業 (学びの質) ● ESD, 海洋教育などでの発表の機会 ● 体験学習の協力 (ワカメ養殖体験, 豆腐づくり) ● 面瀬川生き物調査 (観察場所, 安全配慮)
<p>設備と環境</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 廃棄物分別 ● 農具等の自然素材選択 ● 教育助成金の活用: カラープリンター, ICT機器 	<ul style="list-style-type: none"> ● 地域人材の紹介 (稲作体験等: 公民館) ● 学習参加 (保護者ボランティア: 学校募集) ● 保護者やまちづくり協議会の方々に向けた発表会 ● 尾崎防災公園の利用計画 (講話, ワークショップ) ● 小中連携 	<p>地域との連携</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 海外との交流学習 (Exchange) ● 面瀬さがし (歴史, 文化) ● 幼保小連携 ● 交通安全, 巡回指導

(6) 職員研修について

ESDに関する教員研修は、本市において次のものを実施している。6月と2月に開催している気仙沼ESD/ユネスコスクール研修会では、カリキュラムや地域連携に関する情報交換が行われている。また、11月に面瀬小学校を会場に開催している気仙沼ESD/RCE円卓会議では、最先端の理論や実践、行政や企業等で行われているESDやSDGsについて情報共有することができる。さらに、ESD東北コンソーシアムによる研修会や発表会が近年積極的に開催されるようになってきている。リモート研修も含め適宜参加利用を促進していく。

ESDの理解研修は、学校における実践が基盤である。日々の実践によって基礎的な理解や実践の経験を積んでいった上で、校外で実施される研修会に、ESD推進担当者を始め、管理職やESDの経験の少ない教員の積極的な研修を進めていく。